



TITLE:

北支の物價高に就いて

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

CITATION:

穂積, 文雄. 北支の物價高に就いて. 經濟論叢 1941, 53(2): 241-245

ISSUE DATE:

1941-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131577>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號二第 卷三十五第

月八年六十和昭

論叢

勢力經濟學序説……………文學博士 高田 保馬

先秦經濟思想史序説……………經濟學士 穗積 文雄

支那銀行の畸形的推移……………經濟學士 德 永 清 行

研究

ナチス勞働保護政策の原理……………經濟學士 中川 與之助

ベンチュラム景氣理論に於ける貯蓄と投資……………經濟學士 一谷 藤一郎

價格安定政策の資本形成效果……………經濟學士 青 山 秀 夫

獨逸の廣域經濟論……………經濟學士 松 井 清

說苑

北支の物價高に就いて……………經濟學士 穗積 文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

説苑

北支の物價高に就いて

穂積 文雄

一

この春一月程北支に遊んだ時、一番感じたことの一つは、かねて聞いてゐたところではあるが、その物價がべらぼうに高いと言ふことである。早い話が、宿代など一般に大變なもので、勿論それは待遇と相對的なものと言へば言へるとしても、食事もとらぬ一夜の宿泊料が三十金に及ぶ場合があり、それでホテルとしては別にぼつてゐるわけでもないと言ふのであるから、凡そその物價高の大概は想像がつこうと言ふものであるが、それで、切角視察や調査に内地から行つてもホテル代を引き去ると、殆んど動く餘裕がなくなり、かん

北支の物價高に就いて

じんの視察や調査が思ふにまかせぬのではないかなと言ふような話さへ出る位で、それかあらぬか、北京の興亞院の文化部あたりでは、これらの人々の爲に安んじて調査研究のできる施設を造る必要ありと言ふに意見だけは一致をみたとか耳にしたが、それが實現すれば、物價高の事情は別としても結構至極のことと思ふ。書籍なども随分高くなつてゐて、以前角とあつたところを元に書き改めて賣つてゐるのではないかとの話さへ出たが、まさかそれ程でもあるまいが、漢籍など日本に於ける方が安い場合が少くない。右はほんの一例であるが、とにかく物價の高いことは驚くべきものがあり、平均内地の三倍を超ゆると言はれてゐる。それでゐて圓元はパーなのであるから、上陸第一歩、とたんに圓の實質價值は三分の一以下に下る勘定である。いさゝか憂鬱ならざるを得ない次第である。

二

それではこの物價高は何に因るのであらうか。普通には通貨の膨張に歸せられてゐるようである。勿論そ

それはそれに違ひないし、そしてそう言つてしまへばそれまでである。なる程通貨の膨張は事實であり、殊に單に通貨の絶對的數量が増大せるのみでなく、その流通領域の狹隘化に基づくその相對的な數量増大が考へられる時、一層その然るを認めざるを得ぬであらう。然し、凡そ物價は通貨と財貨の相關々係の下に在り、だから物價の變動の原因は貨幣の側に求められるとともに財貨の側にも求められ得るが普通である。そして北支の物價騰貴の原因は通貨の膨張によると言ふのは貨幣の側にのみその原因を求むるものであるわけであるが、はたしてそのみであらうか。財貨の側にも何等かこの物價高を招來せる因子を見出されないであらうか。

三

物價高の原因を財貨の側に求めるとすれば、まづ財貨の減少と言ふことでなければならぬが、そしてここに財貨の減少と言ふのはその需要との關係に於ける供給の割合の小となることであり、從て財貨の減少と言

ふことはその需要と供給の關係よりみて行かねばならぬであらうが、供給の方は短期間に於て見るかぎり、物量的な、コンクリートなものとして扱ふことができるが、需要の方は必ずしもそうは行かぬ。それ故に左様な需給關係に於て財貨減少と言ふことを明示するは困難であるが、需要増加し、供給減少すると言ふことが言へるならば、勿論財貨の減少と言ふことは動かすべからざることとなるであらう。それでそう考へてみてゆく。すると少くとも今次事變後に於て戦後の復興、更に進んで東亞新秩序の建設工作は北支に於ける需要を増大せしめることは確とみてよく、又通貨問題にからまることではあるが、通貨に對する不信用から、これを取得すると直に現物に換へんとする所謂換物貨風潮が戦後の不安空氣の中に發生したが、それは需要の顯著なる増大でなければならぬこと言ふまでもあるまい。この點だけを見れば供給は不變と見るも財貨は相對的に減少し、物價が騰貴すると考へられる。そこで進んで供給それ自身の側に絶對的減少はないであら

うかと考へて見る。すると私は先づ次の事情があげられるのではないかと思ふがどんなものであらうか。

先づ第一に、戦争による生産力の低下があげられよう。そしてそれには戦争につきものゝ一般的治安の悪化と生産機構の荒廢が含まれる。かくて生産力が低下すれば物資が不足し、それが口火となつて物價高を招來するに至ることが考へられざるを得ぬと思ふがどうであらうか。なほ生産力の中勞働力であるが、これは能率と感情の兩點に分けて見る事がこの際に必要なのではなからうかと思ふ。と言ふのは、先づ支那人をなつて吾々と協力せしむることが言ふまでもなく重要事であるが、これには感情の阻隔を除き、意思の疏通を計ることが急務である。そしてそれは、聖戰の意義の強調、新成權の成立その他の高等政策が實施せられ、別して新民會の人々が涙ぐましいまでに眞劍な努力を續けてゐられたりして、兎も角も次第に進みつつあるのを見て心強く感じる次第ではあるが、なほ能率の問題が残る。支那人の勞働能率は低く、だから支那

北支の物價高に就いて

人の勞賃が低廉であると言ふのはただ名義のこと
で、實質的には却て割高であるかも知れぬと言ふのが
從來の通説のようであるが、勞働科學研究所の方々な
どの意見によれば、實驗の結果は支那人は決して先天
的に能率が低いものではなく、從て勞働行程の改善に
よつて日本人の水準にまで引上ぐることを必ずしも不可
能でないが、現下の問題はそれよりも先に勞働者の移
動率が極めて大であり、又移動せぬ場合に在りては、
その罹病率が大であり、從て能率の増進よりも先づ如
何にして彼等を職域に残留せしめ、彼等をして百パー
セント就業せしむるかゝ先決問題であるとせられてゐ
るようである。更に能率が低いと言ふことは必ずしも
事變による生産力の低下には數へられぬかも知れぬ
が、これと先の感情の問題を結びつけると生産力低下
の原因となり得る可能性の方がその反對のそれよりも
大であり得るのではないかと考へられぬことも無いよ
うである。

次に、北支地方は今尙奥地に八路軍が盤據して、そ

の爲に奥地農産物の出廻りが阻害せられたり、或は所謂西北ルートの類のあるあつて奥地物資の第三國への逸脱する事なども考慮の外に置くわけには行かぬかとも思ふが、此點は今立ち入ることをさける。

又、民衆の財貨隠匿、殊に甚しいのは先にも述べた、その換物運動により買占の結果を招來せることもここにあげられねばならぬ。

更に加ふるに、以上人爲的原因とも言ふべきものに對して、自然的原因とも言ふべき一九三九年に於ける北支大水害が物資供給力の減少に拍車づけること少からざるものあつたことは改めて説くまでもあるまいと思ふ。

四

こう見て來ると、なる程こう財貨の供給減少の因が並んでゐては物價の高くなるのはあたりまへであると考えられると思ふが、然し、以上は主に北支に於て生産せられたる物資の出廻りと言ふ立場からの考察に過ぎぬ。然るに北支に於ける物資の供給は、獨り北支

に於て生産せられたるものに限りはせぬ。凡そ一地方に於ける物資の供給はその地方に於ける生産によらざれば他地方よりの移輸入によるものである。それでここに進んでそれを顧みれば、先づ移入は中南支よりのそれが事變以前は随分盛大であつたのであるが、事變後は非常に衰落したのであるから、今ここに考慮に入つて來ぬ。然らば輸入はどうであるか。今天津を例にとつて見ると、數字はこれを省くが、その輸出入貿易金額は事變前を遙に超過してをり、殊に輸入超過の勢が増大してをるのを見る。然しこの場合注意せねばならぬのは輸出入貿易金額の増大は北支の物價高の爲で、その點を考慮して見ると、即ち現在の物價を事變前の約三倍と見て貿易金額を三で割つて見ると物量的にもやはり事變前より減退してゐることになる。但し入超の割合が以前に比して遙に壓倒的となつてゐるから輸入は以前よりも増大してゐるのではないかと考へられるかも知れぬが、更に個々の物資に就いて見れば、例外もないことはないが、やはり事變後の輸入は激減

してゐるようである。殊に先にも述べた如く、中南支との貿易の衰落を對外貿易に於て補償せんとする意味のあることを思ふ時、物資供給の減少がこの輸入比率の増大によつてカバーせられるとは考へにくいのであるまいか。かりに輸入は供給を増大せしめ、從てその意味に於ては價格騰貴を抑壓することにならねばならぬとしても、爲替相場の崩落は輸入貨物の價格を増大せしめ、それはやがて一般物價の騰貴を誘引するに至ることも考へられる。從てこの點より見れば、輸入はむしろ、痛し痒しと言ふところと考へられると思ふがどんなものであらうか。

然しながら、それらの立論の根據は主として海關統計の數字であると言へば、或はそれに於てはスマツグリングによる供給が無視せられてゐることになりはせぬかとの異論が起るかも知れぬ。然し、スマツグリングは暫らく爲替相場の問題を考慮の外に置けば、北支の物價高を前提として成り立つ。そして北支に於けるスマツグリングが問題となる時、それは滿洲國よりの

それが主となるのであるが、今滿洲國と北支では爲替相場はバーであるから爲替相場の問題は考慮の外に置かれることになり、結局北支の物價高がスマツグリングの原因であらねばならぬのであるから、今その物價高の原因を究明する時にそれはとりあげらるべき問題とはならぬのではあるまいか。

五

北支に遊びその物價高を身を以て味はつた時浮べる想念をまとめて以上一聯の推論に展開したのであるが、果して肯綮に當れりや否や、暫らく錄して専門の士の教を俟つ。(昭和十六年四月)